

「お に ぎ り」

ある3月の高校入試の朝、私は引率の生徒と一緒に駅の待合室にいた。すると、引率とは関係のないK先生が現れた。「どうしたんですか？」と聞くと、「うん、ちょっと激励しようと思って。」と言いながら、N男にあるものを手渡した。N男は父子家庭であった。しかも、父親が足の骨折のため入院し児童相談所に一時預かりになっていた。そんな彼にK先生が手渡したのは、昼食用のおにぎりであった。奥さんに握ってもらったのだという。K先生は、「このくらいしかやってやれることがないから。」とはにかみながら言った。ルールを守れず、教師に暴言を吐き、授業を抜け出しては逃げ回る生徒には厳しい指導が必要であると信じていた時代。生徒が問題行動を起こすと、その学年・学級は何をやっているんだと責められた（と感じた）時代。K先生の行動に、大きなショックを受けた。教師として「そこまでする必要があるのか」と思うことがたくさんあった。しかし、そこまでやるからこそ、人を信じることができない子どもたちが、未来に希望をもつことができることをK先生から学び、教育を支えるものが寛容と善意であると悟った。そして、私の目標となった。秋田でこの仕事に就いたことで、K先生と同様に目標とすべきたくさん教師との出会いがあった。

時代が変わっても、仕事の本質は変わらない。教育は心を耕すという大きな役割を担っている。堅く押し固められた地面に花の種を蒔いても芽は出ない。しかし、時間をかけて、汗を流し、より深く耕すことで、その種は自らの力で根を張り生長し大きな花を咲かせることができる。人の心も同様に、社会の中で持ち味を生かしながら活躍する姿をイメージしながら、時間をかけて温かな関係を積み重ねていくその先に、子どもたちの笑顔という花を咲かせることができる。その過程で出会う子どもたちの成長や自立していく姿に、私自身大きな感動や幸福感を味わい、秋田で教職に就いたことに喜びややりがいを幾度も実感することができた。これから教師を目指すたくさんの若い人たちにも秋田の教育のよさを受け継いでほしい。そして、この仕事の醍醐味を是非味わってほしい。